

令和4年度南アルプスにおける捕食者対策事業実施結果と次年度計画(案)

1. 南アルプスにおける捕食者対策事業

1) かご罠での捕獲状況

テン及びキツネそれぞれ1頭(どちらも肩の小屋で捕獲)

テン：6月3日 捕獲

6月5日 へり移送にて南アルプス事務所へ引き渡し

6月7日 信越自然環境事務所職員により那須どうぶつ王国へ生体搬送

キツネ：7月22日 捕獲

7月24日 歩荷にて南アルプス自然保護官事務所へ引き渡し

7月27日 南アルプス自然保護官事務所職員により飯田市動物園へ生体搬送

両個体共に生体搬送を実施し、現在まで動物園で生存している。飯田市動物園では本事業で捕獲した個体であることを掲示しながら展示することを検討中。テンについては本年度業務で捕獲した個体で24頭目(表1参照)、キツネについては平成30年にソフトキャッチ罠を試験的に導入した際の結果に続き2頭目。なお、捕獲を担当した山小屋関係者からは、今回捕獲できたキツネは誘引餌への食いつきがよく、かご罠に誘導することができたが、今後もかご罠でキツネを捕まえられる可能性は低い。一方テンは現在も複数個体が小屋近くにいるが、なかなか捕まらない状況にあると報告を受けている。

捕獲場所	年	5月			6月			7月			8月			9月			10月			合計
		下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬			
北岳肩の小屋	H29		3	1										1		1		6		
	H30								1				1			1		4		
	R1		1		1											1		3		
	R2					1												1		
	R3			2														2		
北岳山荘	H29	1	1															2		
	H30	2					1											3		
	R1																	0		
	R2																	0		
	R3					2												2		
合計		3	7	1	2	2	1	0	1	0	0	1	0	2	1	0	2	23		

表1 過去のテン捕獲実績

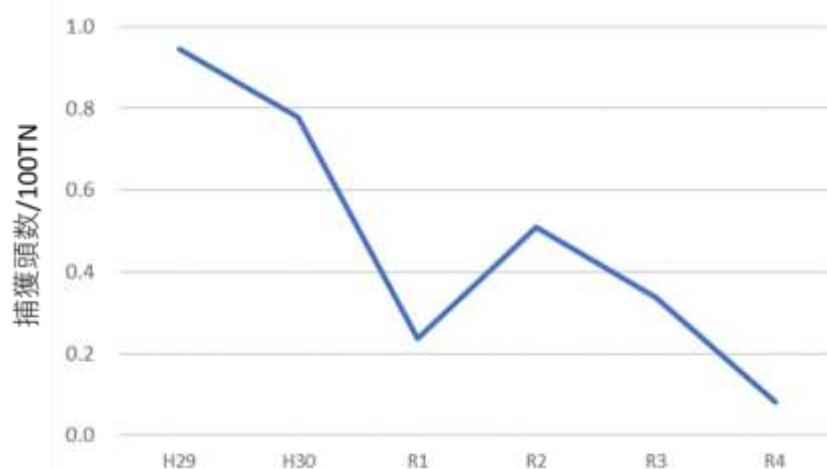


図1. 北岳におけるテン捕獲効率の年変化



図2. テン捕獲効率の季節変化 (H29~R4)

(2) 筒わな

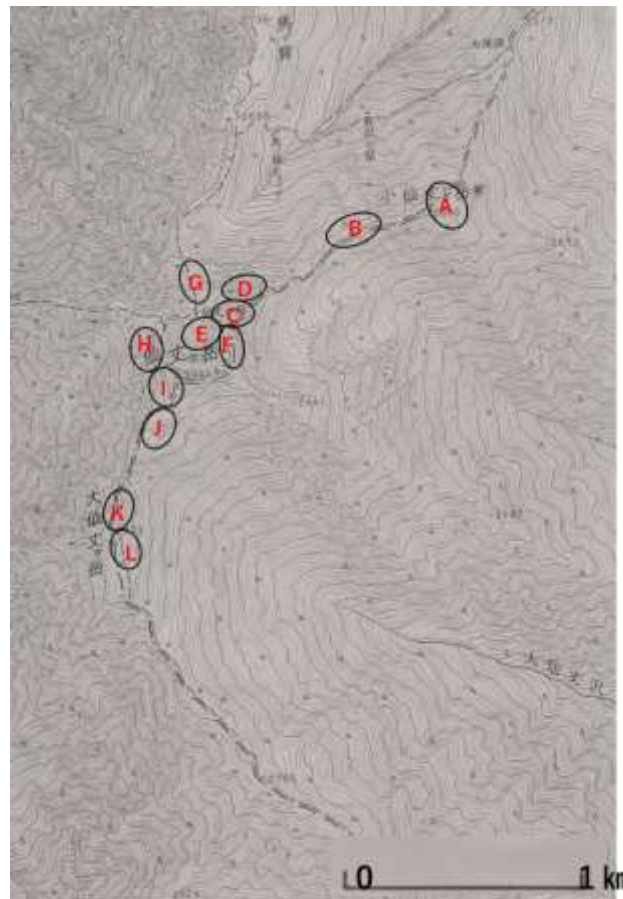
設置場所	設置数	設置期間		餌	回収時の状況
		設置	回収		跳ね上げ
南アルプス					
令和2年度 北岳山荘	2	9月24日	5月30日	残っていない	1つは跳ね上げがあったが捕まっておらず。もう1つは跳ね上げなし
肩の小屋	2	8月21日	6月1日	—	跳ね上げなし
令和3年度 北岳山荘	2	11月2日	5月27日	残っていない	跳ね上げなし
肩の小屋	2	10月31日	5月26日	残っていた	跳ね上げなし

(4) ライチョウの生息状況

令和4年に確認されたなわばり：北岳周辺 13、仙丈ヶ岳周辺 12



令和4年北岳周辺



令和4年仙丈ヶ岳周辺

北岳周辺のなわばりの数は昨年度に引き続き 13 個であった。昨年度と比較すると肩の小屋以北のなわばりが見られなくなり、間ノ岳山頂周辺で5つ確認されていたなわばりが4つに減少した。一方で、北岳山頂北西部、ポーコン沢の頭、三国平方面で新たになわばりが確認された。

また、仙丈ヶ岳では昨年8個だったなわばりが12個まで増加した。

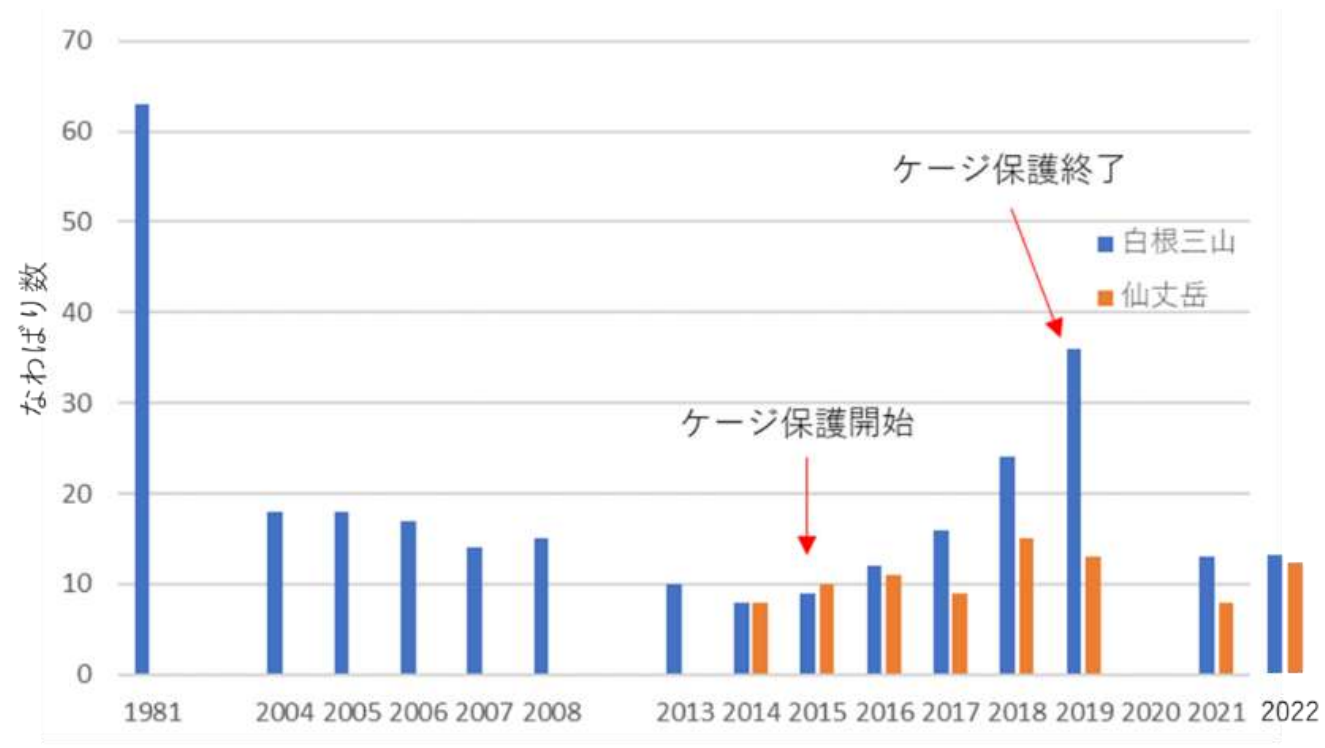


図2. 南アルプス北部地域（白根三山北部及び仙丈岳）におけるライチョウのなわばり数の変化

2. センサーカメラ調査

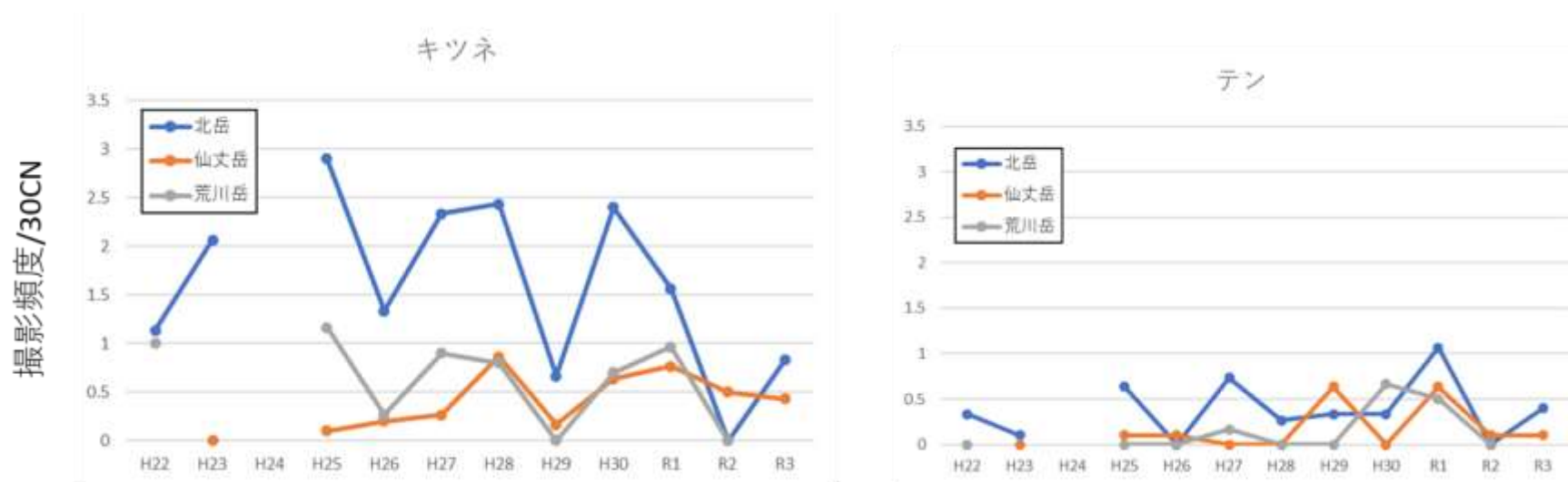


図3.ライチョウが生息している環境内もしくはその周辺に設置されたカメラで撮影されたキツネとテンの撮影頻度(南アルプスにおけるニホンジカ捕獲業務内から抜粋して整理)

3. 令和5年度南アルプス北岳周辺におけるライチョウの捕食者等対策(案)

(1). 南アルプス北岳周辺における捕食者対策の基本方針

南アルプス北岳周辺では平成 29 年からライチョウの捕食者となるキツネやテンの捕獲作業が開始され、令和 4 年秋までの 7 年間でテン 24 頭、キツネ 2 頭が捕獲された。捕食者対策とケージ保護を並行して実施した令和元年度まではライチョウの個体数は増加したが、捕食者対策のみに切り替えた令和 2 年度以降はライチョウの個体数が減少した。(ケージ保護のみを実施した平成 27 年度から 28 年度まではライチョウの増加率が低かった。) 以上のことから、捕食者対策の効果は否定できない。

センサーカメラ調査や捕獲従事者等の報告では未だにテンやキツネの生息が確認されている一方で、年間の捕食者捕獲数は低下傾向にあり、トラップシャイ個体等、罠で捕獲できない個体がライチョウを捕食している可能性がある。また、キツネは警戒心が強くこれまで用いてきたかご罠ではほとんど捕獲できていない。

テンやキツネは在来種であることから、これまでは主として生体捕獲し他所に搬送する方法をとってきた。しかしこれらの種がかつて高山にほとんど生息していなかったことも考慮し、捕獲作業を拡充、効率化することにより、白根三山北部地域で再び減少しているライチョウの捕食を低減するため、捕殺も視野に入れた新たな捕獲方法の導入が必要であると判断した。

(2). 新たな罠の導入

以下の罠は錯誤捕獲の可能性もあることから、十分な見回りを行い、ノウサギ等の錯誤捕獲等が生じた場合には速やかに放獣を行う体制をとる。これまでも設置しているかご罠周辺を中心に、以下の罠を用いて捕獲効率を高める。また、小屋から離れた人目につかない場所にも罠を設置する。使用する罠のタイプについては捕獲作業者と十分協議して決定するが、新たなタイプの罠は肩の小屋周辺で導入する。北岳山荘についてはこれまでと同様、かご罠及び筒罠での捕獲を継続する。

緩衝性足はさみ罠

利点：設置が簡便で捕獲地面を掘るなどの作業不要で設置可能。

設置の際の留意点：錯誤捕獲の可能性があることに加え、捕獲個体の損傷を防ぐために、見回りを頻繁に行う必要がある。反応過重を軽くしてしまうとライチョウが錯誤捕獲される可能性もあるため、キツネのみを対象として反応過重の重いものを運用する。



足くくり罠

利点：バネを選択することで反応する過重を変えることができる（1kg程度から反応するものが選択可能）ため、ライチョウ等体重の軽い動物の錯誤を防ぐことができる。こちらの罠も基本的にはキツネを対象として運用する。

設置の際の留意点：設置にはくくり板が作動するように地面を掘り、カモフラージュを行う必要がある。穴の深さが浅いと捕獲個体が自身を損傷してしまう恐れが大きくなる。



胴くり罠

利点：構造が単純で設置も容易。くりサイズを調節することで錯誤対象を減らすことができる。

欠点：対象の通り道にピンポイントでかけないと捕獲できないため、難易度が高い。

*構造上ライチョウはすり抜けられると思われる。ニホンザルについてもサルが通り抜けられないサイズのものを設置すれば錯誤の可能性が低い。



3. 既存の罠の運用方法の変更

筒罠の改良と小屋外での使用

越冬期間中の小屋に設置するテン捕獲用の筒罠については、令和2年度から南アルプス、令和3年度から中央アルプスでも導入しているが、未だ捕獲実績がない。そのため、低標高地や動物園で試験を実施し、必要な改良を施した上で小屋閉め時（11月頃）の設置を目指す。

また筒罠は、現在は小屋内にも設置しているが、かご罠を設置しているエリアで夏季にも使用することを検討する。ただし、小屋外に設置する際には鳥類の侵入を防ぐためマングース捕獲用の罠でも取り付けられているT字のアタッチメントを付ける。



奄美地域で利用されている鳥類の錯誤捕獲を防止するためのアタッチメントを付した筒罠

4. 捕獲時期の集中

これまで7月下旬から9月中旬までほとんど捕獲実績がないため、肩の小屋、北岳山荘両小屋共に、小屋明けシーズンと小屋閉め期間に集中的な捕獲を行う。

<各罨の設置予定まとめ>

肩の小屋

罨の種類	個数	5月	6月	7月	8月	9月	10月	冬期 (小屋閉め期間)	備考
胴くり罨・足はさみ罨等	4		←→				←→		かご罨との併用が難しい場合は新たな罨の方を優先して設置
かご罨 (従来式)	2		←→				←→		
筒罨	2		←→				←→		小屋閉め時は北岳山荘で利用

北岳山荘

罨の種類	個数	5月	6月	7月	8月	9月	10月	冬期 (小屋閉め期間)	備考
かご罨 (従来式)	2		←→				←→		春先と晩秋に集中
筒罨	2 (4)		←→				←→	←→	

* () 内は小屋閉め時の設置個数